

## 女子学生における自己と父母の認知について

秋 山 幹 男

わが国の青年心理学が対象としている青年期は、思春期発育の始まりをもって始期とし、社会的・人格的成熟の一応の完成をもって終期とみなす（津留1970）という考えがほぼ学者の間で了解されている。最近宮川（1973年）は、始点を中等教育の開始期におくことを提案しているが、第二性徴の発現とその成熟という身体的生物学的成人化を基底においている点で、大きくい違いはないものといえる。一方、終期を経済的自立と結婚という事態の成立時点に求めているのは従来の考え方と一致している。

青年期は、「自我の第2の誕生の時期」、「自我の危機の時期」、「自我の沸騰する時期」とか「人生の開花期」とかいわれ、自己に対する問いかけ（探究）より出発し、理想自我と現実自我のずれの認知に苦しみながら（自己批判）新しい自我の発見をなし、その自我の確立・拡張をはかる時期だとみなされている。そのために閉鎖的傾向が強まり、自己の内面的な世界へ沈潜し、自己が何者であるかを模索し続けるあまり、ますます他者との対立的比較に陥り、友達と比べて自己の欠点を大きくクローズアップしたり、親とのかかわり方においてもしばしばトラブルを生じさせたりする。つまり、青年期は、自我の意識に目ざめ、その内面生活を充実させる時期であり、青年の自立は、親との生活から解放され、自己の内面をいかに形成するかという自己形成の問題とかかわっている（久世1972）といえるのである。

それでは、一人の人間にとってこの青年期とは、発達の流れの中においてどのような位置を占めているのであろうか。臨床的・人類学的経験をもとにして、生活周期（life-cycle）という独自の説を打ち立てた Erikson（1959）は、青年期というものを次の如き位置づけの中に描き出している。

発達過程	主要な生活課題と危機の内容	主要なかかわりの対象
乳 幼 児 期	信 頼 対 不 信	— 母
初期幼児期	自 律 性 対 恥 ・ 疑 惑	— 両 親
幼 児 期	主 導 性 対 罪 惡 感	— 家 族
児 童 期	勤 勉 さ 対 劣 等 感	— 近隣・学校
青 年 期	同 一 性 対 同 一 性 の 混 乱	— 仲間・外集団・リーダー
若い成年期	親 密 さ 対 孤 独	— 友情・性愛
成 人 期	生 殖 性 対 自 己 停 滯	— 家政・伝統
成 熟 期	統 合 対 嫌 惡 ・ 絶 望	— 人類・親族

（死への心の準備完成）

彼は、自我同一性の確立が青年期の主要な生活課題であるとし、そのかかわりの主な対象としては、両親との関係から外集団・仲間・リーダーなるものとの関係へと移行するのが正しいかかわり方の発達であるとみなしている。青年は外的な拘束を極端に嫌い、家庭から解放されたい欲求（心理的離乳）をおこすけれども、まだまだ両親の保護なしには独立できない自己つまり依存の傾向が強いことも知っており、この二面性をもつ内心の矛盾により葛藤を引き起す。これはし

ばしば親子間の葛藤までエスカレートすることにもなる。

では一体青年達は、自己の位置づけをどのように把握し、どのような内面生活を過ごしていくのであろうか。また親中心の生活のパターンから、同じ世代の仲間を中心にした生活パターンへの切り換えをどのようにしておこなってきているのであろうか。それらの過程においては、性格的なものからくる違いが見られるのだろうか。すでに青年後期に該当すると見なされる大学生諸氏は、これまで模索してきた自我の形成をどのような形で完成させようとしているのであろうか。

一方、自己の完成をめざす時期にある青年達が、これまで20年前後もっとも深いかかわりをもってきた親に対する認知はいかなるものなのであろうか。それが客観的にみて親自身の姿とは異なっているとしても、青年自身が彼らなりに把握している両親像も、また彼らにとっては一つの事実であることには違いない。彼らは、彼らの判断に基いて彼らなりの日常生活を過ごし、行動しているのであるから。

このような問題意識から二つの側面に焦点を合わせ、計画されたものが本研究である。

目的：(1) 女子学生における「自分自身」と「青年らしさ」との認知的な差異について。

(2) 女子学生が両親(父母)に対していっている認知とはいかなるものであるか。

またそれは自己とどのようにかかわり合っているのか。

なお結果の分析に当っては、学年による比較と、性格による比較という二方向より追求してみることにした。

## 方 法

被 験 者 広島文教女子大学文学部(1～4年生)120名と短期大学部幼児教育学科(1～2年生)129名の計249名に調査用紙を配布した。内、回収できたのは155名分であったが、記入不備のため4名を除外したので、有効対象者数は151名となった。

測 定 ① 尺度評定法による調査 西平(1970)が「自我同一性」の調査にもちいている75の項目を本調査に使用した。しかし、評定尺度は、彼のもちいた5段階評定を改めて7段階評定とした。対人関係・性格特性・生活態度・社会意識・人生に対する構えなどの諸要因よりなる75項目の内訳は次の如くである。

1 親 切 な	26 不 安 定 な	51 スポーツ好きな
2 おく病な	27 献 身 的 な	52 政治に無関心な
3 さっぱりした	28 感動しやすい	53 (毎日の生活に)生き甲斐 を感じる
4 虚栄心の強い	29 趣味の広い	54 利己的な・自己中心的な
5 やさしい	30 計算高い(がめつい)	55 宗教的な(敬虔な)
6 なげやりなところのある	31 スケール(器)の大きな	56 しょげやすい
7 ユーモアのある	32 あきっぽい	57 ロマンチックな
8 頑 固 な	33 手先の器用な	58 支配欲の強い
9 子ども好き	34 古いものの考え方をする	59 理想主義的な
10 権力を求める	35 美的感覚(センス)のある	60 ひねくれた
11 ものを深く考える	36 疑い深い(不信の)	61 進歩的な(革新的な)
12 意志の弱い	37 礼儀正しい	62 観念的な
13 おうような	38 甘 え (た)	63 几 帳 面 な

女子学生における自己と父母の認知について

- |                |                 |                      |
|----------------|-----------------|----------------------|
| 14 しっと深い       | 39 (性的に)純潔な     | 64 熱狂的な              |
| 15 明るい         | 40 わがままな        | 65 正義感の強い            |
| 16 感傷的(オセンチ)な  | 41 未来に大きな希望をもつ  | 66 ニヒルな(未来に希望や理想のない) |
| 17 行動力のある      | 42 無責任な         | 67 調和のとれた            |
| 18 内気な(はにかみやの) | 43 包容力のある       | 68 目上の人にこびる          |
| 19 若さにあふれた     | 44 粗暴な          | 69 独立心の強い            |
| 20 孤独な         | 45 ねばり強い(根性のある) | 70 強がり(の態度をとる)       |
| 21 指導力のある      | 46 大人のまねをする     | 71 ひたむきな             |
| 22 神経質な(線の細い)  | 47 素直な          | 72 うぬぼれの強い           |
| 23 体の強い(たくましい) | 48 服従的な         | 73 非妥協的な             |
| 24 ヒステリックな     | 49 友人の多い(社交的な)  | 74 強い刺激を求める          |
| 25 冒険好きな       | 50 他人を気にする      | 75 のんきな(楽天的な)        |

評定の対象者は、自分自身、青年らしさ(女性)、母親(自分の)、父親(自分の)でこの順番に調査用紙を綴込んだ。

② モーズレイ性格検査(MPI)

**実施方法** 調査用紙とモーズレイ性格検査用紙を封筒に入れ、学生に配布。記入したら提出するように求めた。記入は各自の住居においてなされている。

**実施期日** 1972年12月中旬配布、同年12月25日までに回収。

結 果

回収できたものを学年と住居の種類との関係で示したものが表1である。学年による比較は、人数が各学年でほぼ一定になる間借り・アパートに住んでいる学生を対象として分析することにした。(但し、3年生は14名、4年生は9名のため3・4年生としてまとめる)。表2は、モーズレ

表1 被 験 者  
(単位 人)

学年	住居の種類 自宅	寮	下宿	間 借 り ア パー ト
1	15	39	2	20
2	10	8	4	20
3・4	8	0	2	23

表2 被 験 者  
(単位 人)

E尺度 N尺度	内向的	普 通	外向的	計
神経症的傾向	8	8	7	23
普 通	8	20	7	35
非神経症的傾向	6	7	9	22
計	22	35	23	80

イ性格検査(MPI)の採点結果に基づいて分けられたものである。1, 2年生を対象にしているが、総計が少ないのは、L尺度が20点以上の者、?の数が20以上あった学生が除外されたり、各々3群に分ける際、得点分布から25%, 38%, 25%の如くに範囲を狭めたため12%にあたるものがさらに除外されたことによる。

性格による比較は、外向性一内向性尺度(以後、E尺度)と神経症的傾向尺度(以後、N尺度)

別に分析するものと、二つの性格特性を合わせた、内面的—神経症的傾向のある学生（以後、I—N 型の学生）、普通—普通の学生（以後、普通型の学生）と外向的—非神経症的傾向の学生（以後、E—non N 型の学生）による比較分析という三通りによって検討される。なお表 3 は 得点範囲と該当する学生の平均得点を示している。

表 3 平 均 得 点 (MPI)

E 尺 度	内 向 的 0~19	普 通 22~32	外 向 的 34~48
	13.5	27.4	39.7
N 尺 度	非神経症的傾向 0~20	普 通 22~32	神 経 症 的 傾 向 35~48
	13.7	26.4	40.4
E - N 尺度	内 向 的 — 神 経 症 的 0~19 35~48	普 通 — 普 通 22~32 22~32	外 向 的 — 非 神 経 症 的 34~48 0~20
	11.9—42.5	27.1—26.2	39.0—14.1

**結果の処理** 評定の対象者ごとに、75項目について7段階尺度法で自己評定をしてもらったが、尺度上には次のような記入がなされている。

あなたは□は、次のような性格だ（特色を持っている）と思いますか？

非 常 に どちらかと ふ つ う どちらかと 全 く  
(しばしば) か な り い え ば わ か ら な い い え ば か な り (決して)  
そう思う (まあ) なんともい そう 思う  
そう思う え ない 思わない そう 思わない

a b c d e f g

この尺度に対して a から g まで任意に 1 から 7 点までの配点をして、二種の処理を実施した。

(1) 多人数の選択項目抽出 この方法で処理された結果は、学年による比較において使用される。まず各学年ごとに60%以上の学生が、(a→c) の尺度上つまり「そう思う」の方いずれかに、または (e→g) 「そう思わない」のいずれかに○印をした項目を抽出する。次いで、得られた項目ごとに振り分けられている配点と該当する人数との積をもとめ、その総和をその学年の人数で割った平均評定値を算出する。さらに得られた平均評定値と照らし合わせながら、「そう思う」方に該当する項目では1.0~3.5の範囲に収まるものを、「そう思わない」方に該当するものは4.5~7.0の範囲に収まるもののみを抽出し、これをもって多人数によって選択された項目とみなした。

(2) 差異得点 (D スコア) の算出 この結果は、学年による比較、性格における比較の双方において用いられる。差異得点の算出法は次の如くである。

$$D = \sqrt{\sum_{i=1}^n d_i^2 / n}$$

$d_i = 2$  つの評定対象間の項目別の差

$n =$  項目数…本来ならばすべて75であるが、一部記入もれなどがあるので評定されている項目数となる。

女子学生における自己と父母の認知について

1 年生		几帳面な 権力を求めない 他人を気にする
子ども好き ひねくれて いない ニヒルでない	感動しやすい 明るい (性的に)純潔な 正義感の強い 感傷的な 親切的な 献身的な	粗暴でない 目上の人に こびない ユーモアの ある
頑固な わがままな 甘えた 支配欲は強くない 友人の多い しっと深い 2 年生	ものを深く考える ロマンチックな やさしい 礼儀正しい	のんきな 宗教的でない 強い刺激を求める 無責任ではない しよげやすい 3・4 年生

図1 評定対象「自分自身」における多人数選択項目

1年生		古いものの考え方をしない 宗教的でない わがままでない 献身的な	ヒステリックでない ニヒルでない 利己的ではない ひたむきな
指導力のある おく病でない ひねくれていない 無責任ではない (性的に)純潔な 政治に関心	若さにあふれた 行動力のある 明るい 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ さっぱりした ものを深く考える ユーモアのある 感動しやすい 趣味の広い やさしい スポーツ好きな 美的センスのある 親切的な 体の強い ロマンチックな 正義感の強い スケールの大きな 進歩的な 理想主義的な 友人の多い 独立心の強い 意志の強い ねばり強い 礼儀正しい	目上の人にこびない 服従的でない 素直な	
権力を求める	孤独な 感傷的な 強い刺激を求める 熱狂的な 子ども好き 強がりの態度をとる 不安定な	頑固な 指導力のある おうような 非妥協的な	
2年生		3・4年生	

図2 評定対象「青年らしさ」における多人数選択項目

差異得点を算出する2つの評定対象者の組み合わせは、分析Ⅰの「自分自身—青年らしさ」、分析Ⅱにおける「自分自身—父親」、「自分自身—母親」そして「父親—母親」の4通りである。

### 分析Ⅰ 自己と「青年らしさ」の認知

1. 学年による比較 図1と2は、各々自分自身と青年らしさについて、多くの学生達が選択した項目を図式化したものである。全学年で共有される項目は、各学年の枠が交わる中央の位置に記載されている。2学年にわたり共有される項目については、その左右と下側に位置づけられている\*。「自分自身」の評定において多人数より選択された項目は、全学年合わせると31項目（1年生—16、2年生—20、3・4年生—19）だが、「青年らしさ」の54項目（1年生—42、2年生—39、3・4年生—39）と比較してかなり少ない。青年らしさとして選択された項目の中にどれ位自己の性格と当てはまるものがあるかを見てみると、全学年に共通している項目は、明るい・感動しやすい・正義感の強い・親切的な、2学年にわたって共通する項目としては、性的に純潔な・ひねくれていない・感傷的な・目上の人にこびない・ユーモアのある・ロマンチックな・やさしい・ものを深く考える・礼儀正しいなどが挙げられる。

表4 平均差異得点とSD

学年	1 年 生		2 年 生		3・4 年生	
	M	SD	M	SD	M	SD
自分自身	1.64		1.81		1.71	
青年らしさ		0.45		0.71		0.55

表4は、学年別にみた「自分自身—青年らしさ」の平均差異得点とSDであるが、学年の違いによる二者の間の認知に差異はみられなかった。この学年別の比較は、各学年の住居環境を揃えるために、間借り・アパートに住んでいる学生を対象になされているが、住居の種類によって二者の間の認知に差異があることも考えられるので、人数の多い1年生を対象にして自宅から通学している学生・寮に住んでいる学生についても平均差異得点を算出してみたが、やはり有意差はなかった（1.66, 1.69）。

2. 性格による比較 E尺度、N尺度別に自己と青年らしさの間の平均差異得点とSDをみたのが表5である。t検定を実施した結果、N尺度においては、神経症的傾向のある学生の方が普通の学生よりも自己と青年らしさの間に大きな差を感じている傾向がみられる（ $P<.10$ ）。E尺度からは、内向的な学生が外向的な学生に比べて認知的に大きな差を感じている傾向をみせている（ $P<.10$ ）。この傾向をさらに突込んで吟味するために、I-N型の学生、普通型の学生そしてE-non N型の学生について平均差異得点を求め、棒グラフとして図示したのが図3である。t検定の結果は、I-N型の学生とE-non N型の学生の間に、またI-N型の学生と普通型の学生との間に各々 $P<.05$ で有意な差がみられた。そこでもっと詳しく分析するために、多人数が選択した項目を中心にしてまとめた学年による比較の場合とは異なり、ここでは主に「そう思う」、「そう思わない」の尺度範囲の双方に30%以上選択が別れた項目を抽出し、それがはたしてI-N型

\* なお図式の中で、1年生—2年生、1年生—3・4年生の共有項目が、全学年共有の項目と比べて同じ高さでなくずらせて記載されているのは、相対的な位置関係がある程度わかるように工夫されたものである。上位に記載された項目ほど、評定対象者の特色を表わしていることになる。

女子学生における自己と父母の認知について

表5 平均差異得点とSD

E尺度	内向的		普通		外向的	
	M	SD	M	SD	M	SD
自分自身	1.81		1.72		1.50	
青年らしさ		0.50		0.50		0.54
N尺度	神経症的		普通		非神経症的	
	M	SD	M	SD	M	SD
自分自身	1.86		1.61		1.61	
青年らしさ		0.52		0.41		0.64

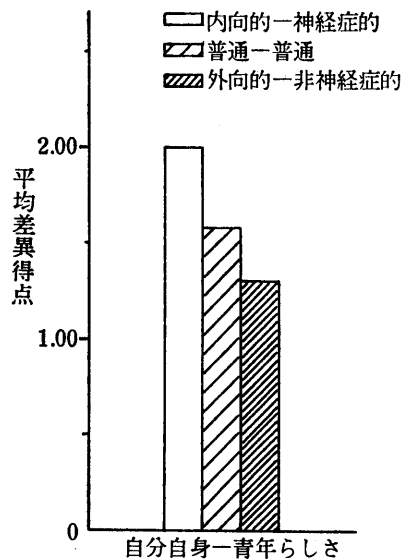


図3 平均差異得点

と E-non N 型の学生の性格的な相違によって生じたのかどうかをみることにした。まず学年別比較で選択が両極に分かれた項目を「自分自身」と「青年らしさ」の評定の中から抽出した。その結果学年別に共通なもの、二つの評定対象に対する出現度などを目安にして37項目が選出された。次いで各性格型の学生別に平均評定値を算定してみた結果、約60%にあたる22項目が自分自身、または青年らしさのいずれかにおいて二つの型の学生の間で1.00以上の評定差をみせるものであることがわかった。さらに任意に抽出した14項目についても同じような整理をしてみても、同じような差を見せるものを新たに3項目追加し、合計25の抽出項目について平均評定値をプロットしてみた。平均プロフィールとしてまとめたのが図4である。

「自分自身」「青年らしさ」共に、I-N型とE-non N型の学生の間で1.00以上の評定差をみせる項目数は全体の84% (21項目) を占めている。次いで異方向つまり、平均評定値が1.0~3.5 (そう思う) と4.5~7.0 (そう思わない) に別れる項目を抽出した異方向不一致の項目は、「自分自身」で60% (15項目)、「青年らしさ」で56% (14項目) になっている。同方向つまり、共に1.0~3.5の評定範囲か、4.5~7.0の範囲の間に位置づけられるものは、両評定対象ともわずかに

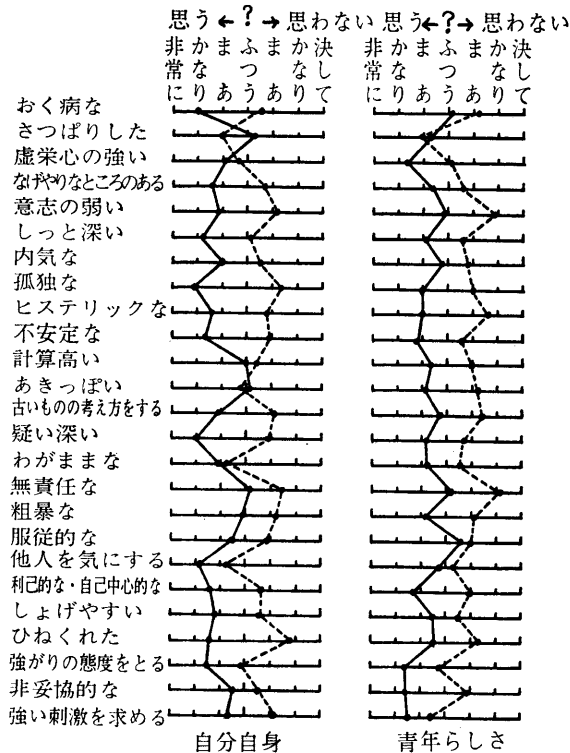


図4 I-N型の学生とE-non N型の学生の平均プロフィール  
(実線—I-N型、破線—E-non N型)

8% (2項目) であった。「自分自身—青年らしさ」の関係を二つの型の学生について検討してみると、次のような相違がみられる。

	I-N型の学生	E-non N型の学生
同方向一致項目	56%(14)	68%(17)
異方向不一致項目	4%(1)	8%(2)
1.00以上の評定差のある項目	32%(8)	16%(4)

このように自分自身と青年らしさの認知で、I-N型とE-non N型の学生の間に、異方向不一致項目においても1.00以上の評定差のある項目においても大きな差異があるような項目内での比較なので、「自分自身—青年らしさ」の認知においてそれぞれの型の学生が、同方向に一致する項目をかなり持っているということは、青年らしさというものを自己認知と類似させて考えていることになる。

## 分析Ⅱ 自己と父母の認知

1. 学年による比較 学年全体で挙げられた父親に対する多人数の選択項目数は49であった(図5)。2～3の例外はあるが、かなり好意的な父親像が描き出されている。特に1年生では他



女子学生における自己と父母の認知について

の学年と比べて、かなり多くの項目を挙げている（43項目）。母親については、全体で42項目が挙げられている（図6）。ここでも好意的な性格像を描き出しているといえる。しかし、母親認知における学年別からみた特徴としては、2年生が他の学年と比べてかなり選択項目が少ないということであろう（21項目）。2学年だけに単独にみられるものは1項目もなかった。自己と父母の三者間で全学年に共有されている項目としては、親切な・明るい・正義感の強い、2学年にわたって共有されるものには、子ども好き・ひねくれていない・ユーモアのある・やさしい・礼儀正しいなどが挙げられる。

父親像や母親像としての相違をみせるような項目としては、父親では、体の強い・ヒステリックでない・ものを深く考える・内気でない・スケールの大きな・感傷的ではない・服従的でない・頑固な・しょげない・趣味の広い・独立心の強いなどが挙がり、母親では、献身的な・手先の器用な・感動しやすい・疑い深くない・ひたむきな・うぬぼれのない・冒険好きでないなどが挙げられている。

次に、「自分自身—父親」、「自分自身—母親」と「父親—母親」の間の認知上の差異をみたのが表6である。いずれの間の平均差異得点も学年が高くなるにしたがって、差が大きくなっているが、t検定の結果は、「父親—母親」の認知において1年生より3・4年生の方が有意に大きな

1年生	調和のとれた スポーツ好きな 粗暴でない わがままでない	几帳面な 利己的ではない 虚栄心は強くない 計算高くない
ニヒルでない	無責任ではない 意志の強い やさしい 体の強い 行動力のある 包容力のある 政治に関心 子ども好き おく病でない ヒステリックではない 礼儀正しい 親切な ひねくれていない 正義感の強い ものを深く考える 不安定でない 指導力のある ねばり強い さっぱりした 内気ではない 甘えたところがない 明るい スケールの大きな 感傷的ではない 友人の多い 服従的ではない ユーモアのある	しょげない 趣味の広い あきっぽくない 独立心の強い
目上の人に こびない なげやりな ところがない 孤独ではない	熱狂的ではない 権力を求める	しつと深くはない 支配欲の強い 理想主義的な
2年生	頑固な	3・4年生

図5 評定対象「父親」における多人数選択項目

1 年生 ニヒルでない 強い刺激を求めない 甘えたところがない 権力を求めない 指導力のある			政治に関心 強がりの態度をとらない 熱狂的ではない おく病でない		
2 年生	孤独ではない 疑い深くない	子ども好き やさしい 無責任ではない 親切的な 献身的な 粗暴でない 明るい ひねくれていない 礼儀正しい 手先の器用な 几帳面な ねばり強い あきつぽくない 不安定でない なげやりなところがない 利己的ではない 感動しやすい 正義感の強い		包容力のある わがままでない  ユーモアのある ひたむきな うぬぼれのない 冒険好き ではない 友人の多い	
		意志の強い		行動力のある さっぱりした 調和のとれた のんきな 古いものの考 え方をする 3・4年生	

図 6 評定対象「母親」における多人数選択項目

表 6 平均差異得点と S D

学年	1 年 生		2 年 生		3・4 年生	
	M	S D	M	S D	M	S D
自分自身 父 親	1.75		1.81		1.95	
		0.46		0.48		0.69
自分自身 母 親	1.58		1.73		1.89	
		0.39		0.57		0.71
父 親 母 親	1.23		1.47		1.77	
		0.39		0.48		0.65

差を感じており ( $P<.01$ ), 「自分自身—母親」の認知においてやはり 1 年生と 3・4 年生の間に同じような傾向 ( $P<.10$ ) が見られるにとどまった。1 年生を対象にしておこなわれた住居の種類別の比較, つまり間借り・アパートの学生と寮や自宅から通学している学生との間の認知的な差異の関係は,  $t$  検定の結果同質のものであって, 住居別による差のないことがわかった。

2. 性格による比較 表 7 は, N 尺度, E 尺度別にみた「自分自身—父親」, 「自分自身—母親」と「父親—母親」の間の認知上の平均差異得点である。 $t$  検定の結果, N 尺度では, 「自分自身—父親」, 「自分自身—母親」において神経症的傾向のある学生の方が, 普通の学生よりも差を有意

女子学生における自己と父母の認知について

表7 平均差異得点とSD

E尺度	内向的		普通		外向的	
	M	SD	M	SD	M	SD
自分自身 父   親	2.01		1.79		1.64	
		0.57		0.52		0.38
自分自身 母   親	1.84		1.69		1.55	
		0.66		0.52		0.43
父   親 母   親	1.62		1.47		1.31	
		0.56		0.49		0.40
N尺度	神経症的		普通		非神経症的	
	M	SD	M	SD	M	SD
自分自身 父   親	2.05		1.67		1.76	
		0.57		0.45		0.47
自分自身 母   親	1.97		1.51		1.67	
		0.59		0.44		0.54
父   親 母   親	1.51		1.42		1.49	
		0.53		0.48		0.49

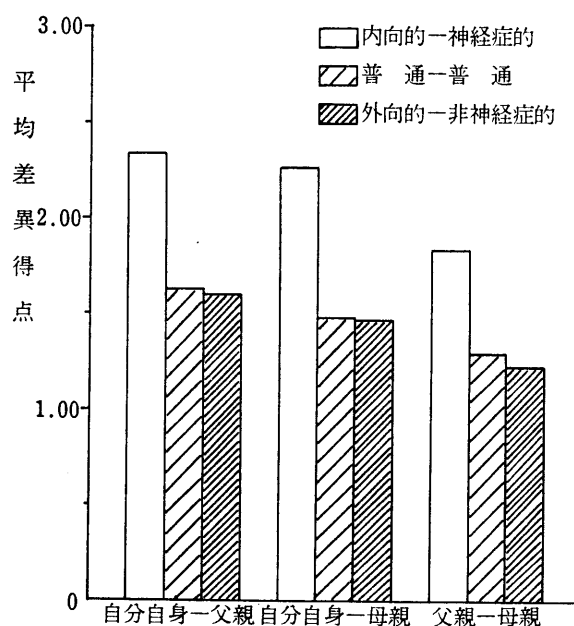


図7 平均差異得点

に大きく感じており (各々  $P < .01$ )、非神経症的傾向の学生との間にも同じような傾向をもつことがわかった ( $P < .10$ )。E 尺度においては、「自分自身-父親」、「父親-母親」において内向的な学生の方が、外向的な学生と比較して差を大きく感じており ( $P < .02, P < .05$ )、「自分自身-母

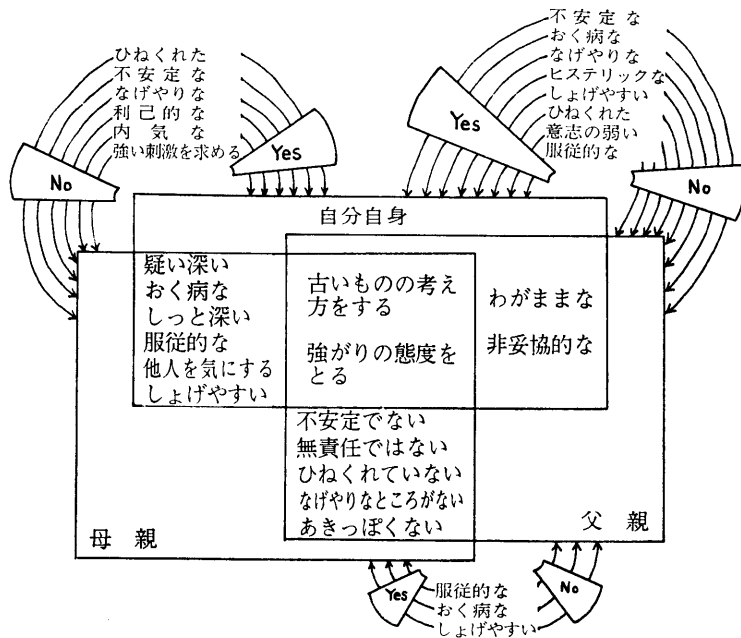


図8 I-N 型の学生における同方向一致項目と異方向不一致項目

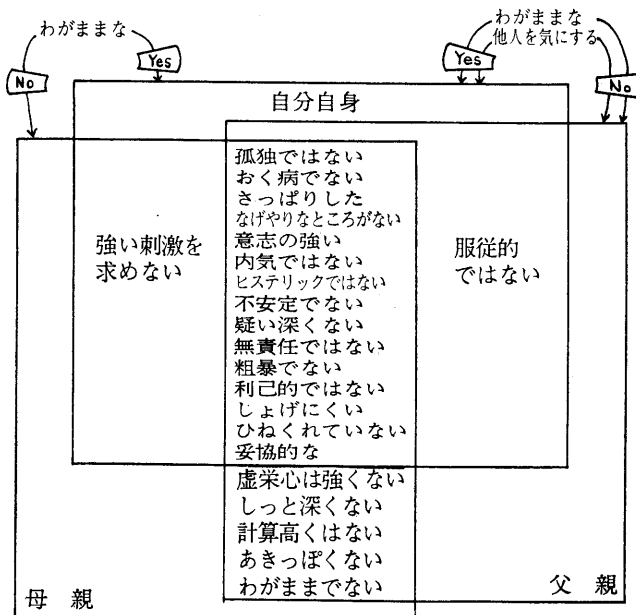


図9 E-non N 型の学生における同方向一致項目と異方向不一致項目

親」の間にも、同じような傾向がみられる ( $P < .10$ ) ことがわかった。

I-N 型の学生、普通型の学生と E-non N 型の学生について検討してみると図 7 の如くなる。I-N 型の学生と E-non N 型の学生の間では、すべての関係において有意な差がみられた (自分自身—父親  $P < .01$ , 自分自身—母親  $P < .02$ , 父親—母親  $P < .05$ )。つまり I-N 型の学生の方が、E-non N 型の学生よりも各々の組み合わせにおいて大きな差を感じているのである。このような関係は、I-N 型の学生と普通型の学生との比較においてもいえる (各々  $P < .01$ ,  $P < .001$ ,  $P < .05$ )。さらにこの差異を詳細に分析するために、分析 I の性格による比較で、両極に分布する項目として抽出された 25 項目をもちいて、自己と父母の認知上の関係を I-N 型の学生と E-non N 型の学生との比較によってみていこう。父親の認知に対する I-N 型と E-non N 型の学生の間と同方向一致項目は 36% (9 項目), 異方向不一致項目は 16% (4 項目), 1.00 以上の評定差をみせる項目は 52% (13 項目) となった。母親の認知における同方向一致項目は 48% (12 項目), 異方向不一致項目は 8% (2 項目), 1.00 以上の評定差は 56% (14 項目) であった。

次に二つの評定対象の組み合わせに対する二つの型の学生の関係をみてみよう (有意差は  $\chi^2$  検定の結果である)。

	自分自身—父親		自分自身—母親		父親—母親	
	I-N型	E-non N型	I-N型	E-non N型	I-N型	E-non型
同方向一致項目	16%(4)	64%(16)***	32%(8)	64%(16)*	28%(7)	80%(20)***
異方向不一致項目	32%(8)	8%(2)	28%(7)	4%(1)	12%(3)	0%(0)
1.00以上の評定差のある項目	64%(16)	48%(12)	60%(15)	24%(6)**	40%(10)	8%(2)**

(\*\*\*  $P < .001$  \*\*  $P < .01$  \*  $P < .05$ )

いずれの評定対象の組み合わせの認知においても E-non N 型の学生は、同じ性格を共通に持っていると認知している。1.00 以上の評定差のある項目数では、「自分自身—父親」において少し多い感じがするが、その他の組み合わせによる差のひらきはあまりない。一方、I-N 型の学生は、E-non N 型とは有意に相違し、いずれの組み合わせにおいても同じ性格を共有しているという認知に乏しく、1.00 以上の評定差のある項目数からみても、かなりの心理的な距離を置いて認知していることがわかる。さらに詳しくわかりやすいように I-N 型と E-non N 型の学生の認知上の差異を図式化してまとめたのが図 8 と 9 である。

## 考 察

分析 I の自己と青年らしさの認知において、「自分自身」の特色として多人数に選択された項目が、各学年共に青年らしさと比べて数が少なかったのは、やはり自己の探究なり、自我の確立をめざす構えが、個人的に異なる面の多いことを示しているのかもしれない。学年別にみた平均差異得点の結果からは、有意な差が得られず、個々の項目の細かい質的な相違はともかくとして、自己と青年らしさとの心理的な距離は大学生ともなると、もはやあまり変化しないものといえよう。

しかしながら、性格による比較からみた二つの評定対象の関係は若干趣を異にする。E 尺度と N 尺度別に検討した結果では、内向的な学生や神経症的傾向のある学生達が他の学生達に比べて、より二者の間の差を大きく感じているようであり、さらに I-N 型、普通型と E-non 型の学生との比較でみた場合には、I-N 型の学生と他の型の学生との間に有意差がみられている。それ

では、I-N型の学生は他の型の学生と比べて不適応な存在下にあったのであろうか。この点に関しては、小林（1972）が49項目の形容詞対を使用して理想自己と現実自己との間の $\Sigma d^2$ を算出し、適応との関係で分類化を試みている研究が参考になる。本分析は自己自身と青年らしさの比較ではあるが、一つの推測をなしえられると思われる。本分析に関係している学生達は、小林の分類に当てはめると次のようになる。

	I-N型	普通型	E-non N型
無緊張	0	1	3
良適応	6	18	6
やや緊張	2	1	0

この結果より、やや緊張の学生がI-N型、普通型の学生には見られるのに対し、E-non N型の学生には見られず、逆に無緊張のものがかなり存在している。しかし、良適応の状況下にある学生が主流を占めている点でまったく異質な適応パターンをとっている学生達ではないといえる。

尺度の両極に人数が分散した項目を中心としてまとめた25項目に対するI-N型とE-non N型の学生における「自分自身」と「青年らしさ」の平均プロフィールの結果は、性格的な相違と尺度上の両極への分散の偏りをみせた項目とが、密接な対応関係をもっていたことを示している。それらの項目が性格特性の要因をもつものであるから当然関係をもつと考える方が今のところ妥当であろうが、「自分自身—青年らしさ」の認知の相違を二つの型の学生ごとに比較してみた結果からは、青年らしさの認知が、自己の認知から大きくかけ離れて設定されるものではなく、あくまでも自己を一つのモデルとして設定されるものであることがうかがえた。このことは非常に興味深い結果であるといえる。すなわちI-N型の学生は、自己にあったI-N型的な青年らしさを頭に描くし、E-non N型の学生は、やはりこれも自己にあったようなE-non N型的な青年像を描くということになり、これまで印象的にではあるが推測していた学生間の認知的な差というのが、この結果よりある程度裏づけられたように思われる。

椎野・村田（1967）は、self-differential scale をもちいて現実自己（Sp）と理想自己（Si）の差異得点を算出し、大学生の正常群と神経質群の間に有意な差（ $P<.05$ ）を見い出している。つまり、後者の方が前者よりも大きな差をみせている。森下（1969）は、Y-G 性格検査をもちいて自己の現実像と理想像を測定し、差の大きい者（大群）、中の者（中群）、小さい者（小群）にわけて、要求水準・屈辱回避要求・自己評価との関係をみた。その結果、現実像と理想像の差の大きい者の方が、小さい者より要求水準は有意に高いけれど、達成度は逆に小さい値をみせることをみた。さらに、屈辱を回避しようとする要求は、「差」の大きい群の方が他の群よりもその要求が高く（ $P<.01$ ）、自己評価に関しては、「差」の大きい者の方が自己評価が低く、小さい者の方が自己評価が高いという関係を見い出した。これらの研究の結果と、本研究の結果である性格の違いからくる「自分自身—青年らしさ」の認知上の差が、どのような対応関係をみせるかは今後の興味ある課題といえる。

ついで分析IIの自己と父母の認知の結果に触れると、多人数に選択された項目からは、まず父親と母親に対する共通な認知は、自己の認知よりも選択された項目が多く、それもかなり好意的な見方をしていることがわかった。また、父親像・母親像としての区別がなされるような項目もかなり抽出されている。依存と独立の欲求の谷間に存在している青年達も、大学生になると認知の仕方かなり安定してきており、プラス的な見方ができるようになっていることもうかがえる。学年別にみた平均差異得点からは、「父親—母親」との間に認知の差が1年生と3・4年生で

は有意に異なることをみた。これは学年が高くなるにつれて、より両親の性格的な差・男として女としての成人の役割の認知が増してくるためと考えてもよいであろうか。さらに、同性としての自己と母親との間にも、学年が高くなることにより認知の差が増す傾向のある点も注目に値する。

性格による比較からみた自己と父母の認知関係では、分析Ⅰよりもさらに大きな相違というものがうかがえることはまことに興味深い。同じ大学で席を同じくする学生であっても、その性格によって認知する内容が異なっている。それは長年共に生活してきている両親に対する主観的な関係においても例外ではない。実際に学生達の両親が、学生の主観的に認知しているそのままの性格をもっているといい切ることはできない。いやむしろまったく逆のケースだって有り得る。しかし、これから自我の確立を自分で完成しなければならない女子学生青年達が、いかに主観的にではあれ両親に対してある見方をしているという事実は、疑いもなく彼女達にとって真実なのである。I-N型の学生と他の型の学生達を比べた場合、I-N型の学生は、「自分自身—父親」、「自分自身—母親」、「父親—母親」のいずれの認知的関係においても有意に大きな差をみせているし、さらに突込んだ25項目の対応においては、客観的な親子関係は今のところ別にしても、何と認知的に大きな相違をみせることか。E-non N型の学生が認知する三者の関係は、非常に接近しており同じような性格を共有していると考えている。わずかに自己と母親との間に「わがままな」、父親との間「わがままな」・「他人を気にする」の項目において異方向不一致を見出すのみ。父母の間には、異方向不一致の項目は見当たらなかった。これに対し、I-N型の学生の認知する三者の関係は、自己と両親との間に共通する項目ははるかに少なく、異方向不一致の項目として相対立するものが多い。

これまで講義の骨子に据えてきた青年期の親子間の葛藤、または世代の磨擦としての親子関係は、まさに I-N 型的な青年にあてはまり、E-non N 型の青年にはあてはまらないのだろうか。それとも後者の型の青年は、すでにその段階を以前の時期において脱皮しているのであろうか。稲田(1969)は、高校生を対象にして青年期男女の父母との類似性について調べ、親との類似性の高いものは不安傾向が低く、また不安傾向の低いものは親との類似性が高いという結果を見だしている。さらに、同性親、特に男子の父に対する類似性が女子よりも高いという。すでに高校生の段階でも、不安の少ないものは親との類似性が高いことになる。本研究で得られた E-non N 型の女子大生も、やはり少なくとも高校時代までさかのぼっても、両親との間に大きな認知上の差を感じていたとは思われず、世代の断絶と騒がれる程の真実味は体験していないのではあるまいか。野呂(1973)によると、日本における学生青年の親に対する満足度は、全く満足しているもの10%、一般的に満足しているもの60%、問題があって満足していないものが25%であったという。久世(1972)は、女子大学生で父親との会話ありとする者51.7%、母親との会話ありとするもの88.8%と、かなり両親と会話をもっていると述べており、さらに中学生、大学生ともに両親の愛情をかなり高く認知し、父母に対して好意的な感情を示している。そして、父または母から暖かい愛情のある養育を受けていると認知するものは、愛情の低いと認知するものに比べ、父母に対して困った場面における自己開放性が高いという。これは中学生にも大学生にも当てはまるそうである。また、青年の両親に対する問題解決能力に高い信頼をおくものは、低いものに比べ、やはり自己開放性が高いとのことである。親友への信頼度が高まり、親から自立・独立への傾向を強めていく青年期においても、こういった結果が得られているのである。

では一体、E-non N 型の学生と両親とのこれまでの生活、特に心のふれあいは、いかなるものであったのか。現在はどうなのか。また、I-N 型の学生と両親との関係は、少なくとも認知的な

レベルでは、前者の関係ほど信頼をおいていないのであろうか。この点も今後の大きな課題であろう。ひいては、この堀り下げが、子と親の好ましい人間関係の把握への足掛かり、特に青年期における親子関係のあり方についてプラスの寄与をなしうるのではあるまいか。野呂（1973）は、『真の自我の確立あるいは「自我の発見」は、単に目を内界に向けるという「自己志向性」によって達成されるのではなく、外界に対して意識的に働きかける「社会志向性」を媒介とした「自己志向性」によって達成されるであろう』と述べている。「青年らしさ」の評定が、自己認知に基いて成されるということがわかってきたこの次のステップは、どうすれば異なる性格を持った青年同士がお互いの長所を理解し合い、異質な仲間関係の中でも、お互いにプラスになるような実りのある青年期を過ごし合えるようになるかということになる。古沢（1973）は、「個人が自分の中から産出することのできる考えは、個人がそれまでに経験したことに限られることで、そこに自ら限界をもっているといえる。しかしながら、自分が出会った一つの葛藤状況を新しい側面から解釈していく行き方は、同時に自分の経路の範囲を越えたところにしか生まれないといえる。全く別の経路の中に生まれ来ている他者の中から生じた捉え方に出会い、それが取り入れられた時に初めて彼は、今までの経験の枠を越えることができるわけであろう。」と述べている。まったくその通りだと思う。Erikson（1959）が主張するように、青年期としての主要な発達課題である自我同一性が、現象としてではなく、個人の実感として自分の存在の中核に位置づけられるときこそ、青年達は、自信をもって世の荒波の中に船出していけるのだと思うのである。

## 文 献

- Erikson, E. H. Psychological Issues: identity and the life cycle New York: International Universities Press, 1959（小此木啓吾訳編「自我同一性」誠信書房）
- 古沢 頼雄 人格形成の過程 現代青年心理学講座4「青年の性格形成」1973 金子書房 41-83
- 稲田 準子 親子の類似性と性差について 日本教育心理学会第11回総会発表論文集 1969 64-65
- 小林 利宣 自己概念の測定 未発表 1972
- 久世 敏雄 青年と世代の断絶 現代青年心理学講座6「現代青年の社会参加」1972 金子書房 1-52
- 宮川 知彰 青年の性格構造 現代青年心理学講座4「青年の性格形成」1973 金子書房 1-40
- 森下 正康 自己の現実像と理想像との差異に関する研究 日本心理学会第33回大会発表論文集 1969 369
- 西平 直喜 「存在」への自覚過程 津留宏編 青年心理学 1970 有斐閣 134-145
- 野呂 正 自我の形成 現代青年心理学講座4「青年の性格形成」1973 金子書房 83-133
- 椎野 信治 村田 明 適応の指標としての自己概念の検討 日本心理学会第31回大会発表論文集 1967 249
- 津留 宏 青年心理学の立場 津留宏編 青年心理学 1970 有斐閣 1-35

〔後 記〕 本研究のために忙しい時間をさいて調査に協力して下さった広島文教女子大学の学生の皆さん、また単純な繰返し連続であるデータの整理を快く引受けて下さった文学部国文学科3年生の山根智子さん、来山敬子さんら多くの学生諸氏に心よりお礼を申し上げます。